

日仏交流一五〇周年記念コンファレンス 「フランス銀行と日本銀行 相互の考察」について

▼本年一月八日、日仏交流一五〇周年を記念したフランス銀行と日本銀行の合同コンファレンスが、パリのフランス銀行本店において開催されました。その概要について、パリ事務所から報告します。

＜コンファレンスの概要＞

▼このコンファレンスには、フランス銀行のノワイエ総裁、日本銀行の福井総裁が参加し、約二〇〇人の日仏政府・企業関係者や研究者の方々が集まりました。両総裁は、開会の挨拶を行い、日仏の文化・経済交流に加え、中央銀行間の協力と切磋琢磨が重要であることを強調しました。飯村駐仏大使からも、日仏中央銀行の交流とこれを通じた経済発展への貢献を評価する言

葉がありました。セッションの間には、両総裁がシラク前フランス大統領を迎え、昼食会が催されました。日仏交流一五〇周年を記念したさまざまなイベントを行うことについては、同氏が現職大統領の際に検討が開始されています。

二〇〇八年がなぜ日仏交流一五〇周年記念なのか、という点に疑問を抱く方もおられるでしょう。これは、一八五八年の十月九日に日仏両国が日仏修通商条約を締結し、この年から経済・文化交流が本格的に始まったからです。もちろん、この条約には幾つか問題がありました。日仏の交流の契機となったことは事実です。明治維新後、フランスが日本の近代化のモデルの一つとなったことは、広く知られています。

＜フランス銀行と日本銀行 設立と協力＞

▼第一セッションでは、フランス銀行と日本銀行の歴史が議論され、両行の類似性に焦点が当てられました。日本銀行は、一八八二年に設立されましたが、これに先立ち、松方正義は中央銀行制度を学ぶために欧州に視察に出かけ、フランスのレオン・セー大蔵大臣と会いました。当時新鋭であったバルギー国立銀行を参考とするよう、助言を受けたと言われています。しかし同時に、日本銀行の設立にあたり、フランス銀行の定款や機能も主要な研究対象となったようです。その典型が、商業手形の割引による信用の拡充です。フランス銀行、日本銀行とも、これを通じて当時の主要産業の発展を支援する役割を担いました。産業界の要請に応じて支店の増補も進められました。こうした中央銀行の役割は、当時、金融市場への介入による経済のコントロールに専念していたイングランド銀行と対照的であるとの指摘もあります。もちろん、日仏中央銀行とも、第二次大戦後主要産業が進展する中で、金融市場への介入に軸足を移していきま

す。この点も含め、フランス銀行と日本銀行が、過去において極めて似通った道を歩んできた、と言うことができます。今回のコンファレンスは、フランス銀行本店にあるオテル・ド・トゥールーズの黄金の間というところで行われました。フランス銀行は、一八〇〇



フランス語で開会の挨拶をする福井総裁。



今回のコンファレンスでは、このような点を踏まえ、日仏の中央銀行の歴史と日仏経済の現状をテーマとし、題目を、「フランス銀行と日本銀行 相互の考察」としました。



シラク前大統領をお招きして昼食会が開かれた（左）。シラク前大統領をお出迎えるノワイエ総裁と福井総裁（右）。



コンファレンスは、歴史を議論するにふさわしい「黄金の間」で行われた。

年の設立後間もなく、この邸宅を買取り、その後本店の一部として利用しています。この建物は、一七世紀において、ルイ一三世の宰相のために設計され、その後、ルイ一四世の息子であるトゥールーズ伯の邸宅とするために改築されたものです。フランス銀行のノワイエ総裁曰く、歴史を議論するに、かくもふさわしい場所はありません。

「グローバル化に直面するフランス・日本の経済」

▼第2セッションでは、グローバル化に直面するフランス・日本の経済について議論がなされました。まず、生産性の上昇が経済発展の原動力となることを踏まえ、先進国における生産性上昇率の比較や、通信情報技術の利用と生産性上昇との関係等が議論

されました。次に、地域経済統合がさらなる活力を促すとの観点から、アジアにおける生産ネットワークの構築や欧州の通貨統合といったプロセスが議論されました。いずれのテーマについても、日本・アジア経済の動向に対する参加者の関心が高く、日本側のプレゼンテーションは、そうした関心に十分応えるものであったと思います。

「本コンファレンスの意義」

▼本コンファレンスでは、両総裁が期待した通り、日仏の各界の方々の相互理解や交流を促進することができました。また、フランス銀行との関係強化という意義もありました。ノワイエ総裁は冒頭挨拶において、当パリ事務所の調査・情報交換拠点としての重要性に言及しましたが、今回のコンファレンスの企画実現を通じて、そうした機能は一層高まったように思われます。われわれパリ事務所員は、昨年来フランス銀行のスタッフと会合を重ね、テ

マの設定、招待客のリストアップ、コンファレンスの進行など、細部にわたって共に検討してきました。普段の情報交換では出会うことのないスタッフとの出会いもありました。コンファレンスをオーガナイズするベテランの女性スタッフが、「私は日本のことをあまり知らなかったが、あなた方と働いて日本に興味を持った。今度日本に行ってみようと思う」と言ってくれました。何と嬉しい言葉ではありませんか。

「日仏交流一五〇周年のイベント」

▼日仏交流一五〇周年のイベントは今年いっぱい続きます。一月二十二日の時点では、文化関係を中心に二四のイベントが計画ないし既に実施されています。これらのイベントの詳細は、在フランス日本大使館のホームページ <http://www.fr.emb-japan.go.jp/jp/150/150en.html> に掲載されています。是非、さまざまな分野での「コラボ」の結晶を見に来てください。

フランス銀行と日本銀行 相互の考察 フランス銀行 黄金の間にて - 2008年1月8日

開会の辞

クリスチャン・ノワイエ（フランス銀行総裁）
福井 俊彦（日本銀行総裁）
飯村 豊（在フランス日本国特命全権大使）

第1セッション：フランス銀行と日本銀行 設立と協力

モデレーター ミッシェル・マルゲラ（パリ第8大学教授）
権上 康男（横浜商科大学教授）

中央銀行の歴史的形成

報告者 アラン・プレシス（パリ第10大学教授）
「19世紀のフランス銀行とフランス経済」
石井 寛治（東京経済大学教授）
「近代日本における中央銀行の制度と機能（1882—1914年）」

第二次世界大戦後の中央銀行機能の拡大

報告者 オリビエ・フェイエタグ（ルーアン大学教授、フランス銀行歴史研究）
「国際通貨システムの中のフランス銀行」
矢後 和彦（首都大学東京教授）
「第二次大戦後の中央銀行間協力：日仏間における戦略の比較」

第2セッション：グローバル化に直面するフランス・日本の経済

モデレーター ドニーズ・フルザ（バンテオンソルボンヌ大学名誉教授、フランス銀行基金理事）
中井 毅（JETROパリセンター所長）

フランス、日本および主要先進国における生産性の変化

報告者 ジルベール・セット（フランス銀行マクロ経済分析・予測局）
「労働生産性上昇率の国際比較：日、仏、英、米（1890—2006年）」
川本 卓司（日本銀行調査統計局）
「日本経済の生産性上昇率と技術進歩率」

地域経済統合、グローバル化への対応

報告者 ブノワ・クーレ（フランス経済財政省国庫局課長）
「資本市場の統合：欧州の経験」
佐々木 仁（日本銀行国際局）
「生産・所得面におけるアジア太平洋経済の相互依存関係」

閉会

編集後記

■ゴリラ研究の第一人者山極教授からは、ゴリラの生態・行動を通じて、人間というもののおよび人間の他者との関わりについての原点を教えられたように思います。誌面の都合でインタビューの全てをお伝えできなかったことが残念なほど中身の濃いものでした。近著では、「人間の暴力」を取り上げているなど、人間の分野に研究領域を拡大している教授のこれからのますますのご活躍が楽しみです。

また、沖縄の現代版組踊にみられる、地域の伝統や歴史を、誇りをもって後世に伝達していこうとする試みに、深い感銘を受けました。

デア駐日ドイツ大使は、外国の方として対談初登場でしたが、米国が重視されるわが国において、環境をはじめとして、「地球市民意識が強く、グローバルな責務を果たすことに関心がある」ドイツなど欧州から学ぶことが少なくない、改めて感じた次第です。(恵谷)

■今から500年の昔、按司(領主)阿麻和利の居城だった世界遺産・勝連城跡のある町で、現代版組踊「肝高の阿麻和利」を観て来ました。演者は全て中高生。自分たちの生まれた町への誇りや、打ち込めるものを見つけられた喜びに満ち溢れた舞台に、心が揺さぶられました。「肝高」とは志が高いという沖縄の言葉。まさにこの肝高き子供たちの舞台を、機会があったらぜひ多くの方々にご覧いただけたらと願います。長い歴史が育んできた豊かな文化や伝統を持った町がひとたび誇りを取り戻した時、子供だけでなく大人の心をも変えていく。文化が人をつくる。その見事な証左が勝連にありました。(AU)

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。

(<http://www.boj.or.jp/type/pub/nichigin.htm>)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解については、日本銀行ホームページ(<http://www.boj.or.jp/>)をご覧ください。

にちぎん 2008年 春号
編集・発行人 恵谷英雄
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-2405

デザイン 株式会社市川事務所
印刷 株式会社廣済堂
©日本銀行情報サービス局 禁無断転載

*本誌の用紙は、環境・社会・経済のすべての側面に配慮した厳しい基準に従って適切に管理された森林からの木材を原料としていることを示す、FSC認証紙を使用しています。

「第三回 日銀グランプリ」 「キャンパスからの提言」の 決勝開催

▼日本銀行では昨年十二月十五日、本店において「第三回 日銀グランプリ」キャンパスからの提言」の決勝を開催しました。今回は、「わが国金融・経済の課題と明日への処方箋」をテーマに、現在のわが国の金融・経済を見渡して、「今、何が問題か」「課題を克服し、さらなる発展に繋げていくための処方箋はどのようなものか」という点について考えてもらうこととしました。一次審査の対象となる論文には、前回を大幅に上回る八三編の応募が寄せられ、そのなかから五チーム(東京大学、慶應義塾大学二チーム、明治大

学、香川大学)が決勝に進出しました。▼決勝当日は審査員として、日本銀行からは岩田一政副総裁(審査員長)、須田美矢子政策委員会審議委員、野田忠男政策委員会審議委員が、外部からは高橋伸子氏(生活経済ジャーナリスト)、林野宏氏(経済同友会副代表幹事)が参加しました。最優秀賞には、「子ども未来投資基金」を支える金融、つなぐ金融」をテーマにした東京大学チームが輝き、このほかに優秀賞二チーム、敢闘賞二チームが選ばれました。決勝チームの論文およびプレゼンテーション資料は、日本銀行ホームページに掲載されています。
<http://www.boj.or.jp/type/release/zuij07/gand0712b.htm>
▼決勝は、各学生チームが一五分間プ

レゼンテーションを行った後、審査員からの質問に答えるというかたちで進められました。各チームとも準備を重ねて本番に臨んだとみえ、短い持ち時間をきちんと守りつつ、ポイントを要領よくまとめたスライドを効果的に使いながら、自らの主張を筋道立ててし



最優秀賞に輝いた東京大学チーム。緊張の空気の中、熱いプレゼンテーションが行われた。

っかり説明していたほか、それぞれにユニークで斬新な発想に基づく提案が聞かれました。その後、審査員からは、プレゼンテーションで示された提案に対して「なぜ、公的機関による関与が必要とされるのか」「経済合理性があるとするなら現時点で実現していない理由はないか」などの厳しい質問が次々と投げかけられましたが、これに動じることなく自らの主張を堂々と展開する姿には頼もしさを感じられました。▼回を重ねることに、応募数も内容もレベルアップしている「日銀グランプリ」。来年度も開催する予定ですので、全国の大学で学ぶ皆さんには引き続き、斬新でユニークな発想を用いて挑戦していただけることを心から期待しています。